

## カミュと俳句

稲田晴年

カミュの『手帖』には自然や人物の見事な素描が数多く含まれている。これらの断章は感情も解釈も交えずに対象をあるがままに示しているため、俳句に近い印象を与える。俳句とは、具体的な対象を喚起しつつ、ある場所で、ある時、誰かに起こった出来事を示すものだ。バルトによれば、優れた俳句はかなりの迫真性で対象を描くため、われわれは「まさしくこれだ！」と叫ぶことになる。こうした性質を持つ俳句は、われわれの身に起こることに対してわれわれをより敏感にさせてくれる。パスカル・サンクという女性の俳句研究者は、俳句は「現実に向け（…）、概念を疑い、われわれをなまの人生体験から切り離す抽象化に不信の目を向ける」と言っている。これはまさしく、カミュの思想を述べた言葉でもある。

ロラン・バルトはコレージュ・ド・フランスの講義で、小説が自分自身を繰り広げるのに対して俳句は自分自身を折り畳むと言っている。つまり俳句は、いつかどこかで誰かに起こった出来事しか扱わないため、個別性の中に閉じこもる。しかしバルトによれば、出来事を俳句に詠むと、「純粋な偶然性から、言葉によって、超越性が立ち上がる」のだ。俳句において、現実はい個別性を失わずに普遍性を獲得する。だがそのような普遍性に達するには、観察者の主観的印象を表現する形容詞や副詞を排除しなければならない。『ペスト』に出てくる小説家の玉子グランは、行ったこともないブローニュの森を完璧に描き出すために、小説の冒頭の文章を際限もなく手直ししている。しかしある日、「誰でも分かるだろうから、〈ブローニュの〉という言葉削除しよう」と考える。つまり、この世にたったひとつしか存在しない対象を、なんの限定もつけない普通名詞によって指し示すことができると考えたのだ。こうして彼は形容詞をすべて取り去る。彼の芸術的野心は、形容詞に頼らずに個別的なものを描写しつつ普遍的なものを狙う俳句の野心と同じである。『手帖』には、「赤い季節だ。サクランボとヒナゲシ。」という、ほとんど俳句ともいえる断章がある。3つの名詞とひとつの形容詞さえあれば、カミュには素晴らしい俳句が書けるのだ。

『異邦人』では、ムルソーがレイモンの部屋から出てくる場面で、「建物全体が静かで、階段の奥底から暗い湿った息吹が立ち上ってきた」と書かれている。われわれはこの文章を読んで、物そのもののようなこの「暗いしめった息吹」を主観的な説明によって損ないたくないと思ひ、また同時に、より正確な言葉でこの「物そのもの」を捉えたいとも思う。こうしてわれわれは相反するふたつの思ひに引き裂かれるが、それはわれわれが、普遍的であると同時に個別的でもある対象に関わっているからである。この息吹はおそらくこの瞬間にムルソーを襲った虚無であり、また同時に、いつでも誰かに襲いかかる可能性がある虚無でもある。カミュはこの「暗く湿った息吹」を俳句の精神をもって描き、ムルソーが味わった濃密ではかない瞬間を永遠のものにすることに成功した。カミュは日本の俳句を知らなかったであろうが、現在と具体的事物に対する鋭い感受性を持っていたため、いわば彼なりに俳句を書きってしまったのである。